

○ 指導のポイント

本校は今年度、「道德教育改善・充実」総合対策事業（メニュー3）の指定を受け、学校と家庭や地域との連携を図った道德教育の推進をするためカリキュラム・マネジメントの次の3つの視点を大切にしながら「道德学習プログラム」を作成し、実践研究を行った。

- | | |
|--------------|-----------------------------|
| ① カリキュラムデザイン | = 教科横断的な視点で児童の実態を踏まえて組み立てる。 |
| ② PDCAサイクル | = 教育課程の実施状況を評価・検証してその改善を図る。 |
| ③ 内外リソース | = 実施に必要な人的・物的体制を地域とつながり確保する |

【研究仮説】 家庭や地域と一体となった体験活動を含む「道德学習プログラム」の充実を図りながら、道德科の授業における発問を工夫すれば、児童の多面的・多角的な思考と価値観への気付きを促すことができるであろう。

ポイント1

家庭・地域と一体となった体験活動を含む「道德学習プログラム」

「道德学習プログラム」とは、体験活動と道德科の授業を関連させ、道德科の授業において、児童が自分とのかかわりで道德的価値のよさを実感し、道德的価値の自覚を深め、その後自発的、自律的な道德的实践ができるようにするプログラムのことである。昨年度作成したプログラムの改善や、新たなプログラムの作成等、児童一人一人が自分事として捉え、自分なりの価値観を培うことのできるプログラムになるようブラッシュアップを行っている。特に、家庭や地域との連携という視点を加えることで、過年度より取り組んでいる「心の元気プロジェクト」や学校行事、総合的な学習の時間など体験学習と道德科の授業との有機的なつながりを図っている。

ポイント2

発問の特徴についての分析と工夫

道德科における様々な発問の種類や特徴を分析し、各公開授業において、教師の発問が児童にどのような影響を与えるのかを研究協議を通して明らかにしていく。発問の分析においては、下記A～Dに分類整理し、その発問による児童の反応を発言やワークシートから省察する。

- A 主人公の気持ちや考えの中身を問う「共感的」な発問
- B 行為や内容の意味、原因や理由について問う「分析的」な発問
- C 主人公に自己を置換させたり、迷いや葛藤の中で選択的に問うたりする「投影的」な発問
- D 主人公やお話に対する考え、子ども自身のもつ考えや生き方を問う「批判的」な発問

令和元年度 研究構想図

